

あを 2

2015



中野 / 宝仙寺

富士山



須賀忠男

呼称 ふじさん

標高 3776m

山頂住所 〒410-1431 静岡県駿東郡小山町須走（富士山頂）

別名 不二山 芙蓉峰 東山 竹取山 羽衣山 神路山

あそ

二月



書 初

佐藤 喜孝

東京

浮もみぢゐるはずといふ錦鯉

同じ地圖たづさえてをり鴨の池

行く雲の用あるごとし日向ぼこ

枯柏だまされやすきは父ゆづり

輪廻とははかなき願ひ去年今年

書初のやうに一句をつくりたる

五里さきに鴉の啼きぬ淑氣かな

春になるとものの芽のやうに句心も蠢くものらしい。

春を待つ炬燵の上に句帳置き 虚子
傍らに子くれし句帳春を待つ 裕子
似てゐるがそれぞれそれぞれの趣がある。句会で類句類想などと簡単に云つてしまふが、あまり目くじらを立てなくとも思ふ

それにしても春になると季語も華やぐ。春隣・待春から初春・早春・浅春・春信と並べただけでどこかへ出かけたくなる。

前月抄のカットを永らく恩田秋夫先生のカットを使はせて頂いた。『獐』からのお付き合いであった。心機一転、一月号からティリ・エイマさんにお願ひした。エイマさんは動物園、とりわけ市原動物公園が好きでよく出かける。蛇を首に巻いて喜んでゐる子である。あかんぼのころ猫の尻尾を思ひ切り引張た。以来この猫とは大猿の仲である。

☆

井上石動

山梨

ポインセチアちひろの少女五指ひらき

八ヶ岳嵐の町や酒家の旗

竈猫わらふ木喰仏は煤

文字盤の手垢のAや年惜しむ

あめつちを截つや一の矢初稽古

なまじ顔のあるが苦労や初鏡

光塵と注連杉の雪吾に落ちよ

季を待つ

大日向幸江

埼玉

後より鈴の音聞こゆサンタの日

冬の暮屋根の瓦に入る雀

美味になれ言ひつつ沢庵漬け始め

北風にのりて届きぬ忌の知らせ

毎年のことと母言ふ風邪をひき

ピョンピョンと跳ねる少女や冬休

季を待つ伸び伸びと裸木の

年末特番 ガキの使いや あらへん

(NTV)

ダウンタウン・コリコ・山崎芳正の5名。いろいろやってやられて、笑ったら尻を叩かれる・・・という番組。私はダウンタウンの浜ちゃんなる人間は好かない。しかしこの番組だけは録画し、その後大笑いして、家人に冷たい目でさげすまれる、が年初の常。製作者の、その笑わせる為のあれこれ手法に「よく練っているもんだ」と。5名の「やらせでもあり でもなく」の、その虚実皮膜に感動すらする。

笑いに関しては、飯島晴子が読んで感動を受けたという「笑い ベルクソン著 岩波文庫」も読んでみたが、むづかしくてすぐやめた。桂枝雀の「笑いは 緊張と緩和」の方が、よく解る。笑いも種々あるが、必死の状況で生まれる笑いこそ、良質な笑いと思う。挨拶・即興・滑稽が「俳諧」とか。良質な滑稽句を成したいと願う本年。



新 年

齊藤 裕子

東京

生きてをりそれが嬉しや石路の花

龍の玉摘んでとことこママにハイ

草紅葉石の貨幣に縞模様

野外劇場石のベンチに散紅葉

一日を愛しみ生きる花八つ手

子猫にも目薬注すや日向ぼこ

「まさむね」と名付けし猫と日向ぼこ

☆

佐藤 恭子

東京

渾渾と水にビニール息づきて

青のまま空清みすぎる開戦日

身中をあふれ出でたる黄葉の香

はらわたにうふふと落ちし温め酒

お正月屋鳥が見つむ餌の片

東から西へ走りし片時雨

地の呼吸一心不乱に冬鴉

父は歌が大好きで、とても上手かった。自分で書いて作った黒い手帳の歌集を2冊も持っていた。中を開くと、几帳面に目次のページがあり、古い歌から、その頃に流行った父のお気に入りの歌まで、一番から全部びっしりと書いてあった。

子供の頃、夕飯の済んだ円卓を囲んで父はよく、「今夜は音楽会だ。」と言って自家製歌集を取り出し、母と私達3人に歌を教えてくれた。父がワンフレーズ歌った後に、母と私達が真似て歌う。何回か繰り返しした後で、一人ずつ歌わされ、変な所を直される。兄や弟はあまり熱心ではなかったが、私はいつも最後迄母と一緒に歌っていた。異国の丘、船方さん、君恋し、おーい中村君、青い背広で、島娘、王将、古城等々の歌を、テレビやレコードもなかった田舎の村で、父から口写しで覚えた。

父が亡くなり、後年、兄弟で集まった時、大切に仕舞ってあった手帳を開いてみたら、最後のページに、「これは、私の大切な手帳です。拾った方は○○○まで届けて下さい。お願いします。」と書いてあった。皆で大笑いした後、父の好きだった歌を代わる代わる歌った。今でも実家に帰ると、時々、父の思いの籠った手帳を取り出しては、母と一緒に歌ったりしている。

十二月ともなると商人の家に育つ

た私は何となくそわそわする。育った環境にいつ迄経っても抜け切らないのだろう。結婚した先もこれまた職人。十二月はこれまた忙しい。若い頃が懐かしくなってきた。昔を振り返ると先が無いと言われる方がおられるが、なかなかどうしていいものだ。

ふらふら歩くのにも危なっかしくなってきたので、思い出しながら頑張りたい、と思っている。

ある日友達に連れて行かれた飲み屋さんで、出て来た鰯のなめろう。帰宅した途端に、私の方が美味しい。と言ってがっぽっている年末だ。

☆

篠田

純子

東京

密猟の鹿肉なのと微笑みて

極月や歯医者に耳も診てもらふ

蠟梅を突き抜けてゐる光かな

尾に付けた鈴の音いづこ大鷹野

きやうきやうと闘志の叫び鷹野かな

追はれたり二手に分かれ嫁が君

ひよつとこの踊りたどろ屠蘇気分

☆

定梶じよう

石川

大霜や遮断機始発のために閉づ

末枯るるだんだん山が高くなり

阿の仁王さへも口とづこの寒さ

空深きは奈落と思ふ開戦日

蓄音機の犬のごとくに考へる

枯園に漂着したるごとく毬

凧や廃船いまだ錨積み

タブレットをこよなく愛し、寝食を共にしている。寒い日々、早目に床につく夜が増えた。そんな時ユーチューブで昭和の映画に出くわした。上原謙と田中絹代が夫婦役の「煙突の見える場所」という一九五三年の新東宝映画だ。お化け煙突が、見る場所で三本に又四本に見えたりする。そんな町でのドラマ。東京の物資の無い、住宅難の様子が描かれている。その夫婦の家に、捨て子が舞い込んでしまう。病んで死の境を彷徨うも、助かった赤ん坊が笑う。

私も偶然此の世に生まれ、疎まれもせず幸せだった。でも、貧しさ故日の目をみられなかった子、苦勞した子も居た時代だった事を知った。

今夜も、森雅之 東山千栄子 芥川比呂志等、懐しい人達に逢おう。

加賀千代女の「朝顔に釣瓶とられてもらひ水」。晩年まで「朝顔や」か「かに」とするか迷っていたという。両様の真筆がいくつに残っているらしい。

その千代女六歳の時の句と伝わる「たの庭にこもん花咲くみにこんなか」があつて、どうも真作であるらしい。「た」は「たた」の約。「たた」は自分を卑下して言ったことから始まる方言か、と辞書にはあつて、自分のことという。七歳の時と伝わる句に「初雁やそのあとからもあとからも」を作っていて、ほんとかいな、と思ってしまうのは自分の非才を省みない感慨であろうか。

そして二十四歳の時の作に

卯の花は日をもちながら曇りけりの秀作が作られている。しかし当時の俳壇は「見立て」「機知」を重んじ、千代女にもそんな句が沢山あるけれど、それは時代に責任がある。追「こもんの花」は「こでまり」のことです。

枯れる

須賀敏子

埼玉

甦る視力の先に花八手

目薬を点して一分年惜しむ

今年又一つ減らして年用意

今更に高齢化とは冬来たる

刃を入れて林檎の蜜を確かめる

焼芋が逆も美味しい古希の日々

日脚伸ぶ稲葉真弓を読み返す

十二月

竹内弘子

埼玉

ちちははの来て餅花の木を揺する

鼻を撲つ老杉の香や冴返る

煌々と冬木の間の男子寮

蠟梅の枝に恋々たる冬日

白椿あつめて濁り酒かもす

市の灯に花咲蟹の咲き溢る

風邪に伏しサーカスを見たしと思ふ



うしろ

田中 藤穂

東京

連山とまがふ雲あり冬薄

登校の道に開戦ニュース聴く

滑らぬやう歩く銀杏の落葉道

後から冬日の温き別れかな

幼なかりしわが影遊ぶ冬の墓地

冬帽の後姿はあの人か

後手に閉める独りの障子かな

初 雪

長崎 桂子

三重

窓明けて頬の強張る冬満月

冬晴の清しき空気味はひて

河ゆたか草も大樹も冬紅葉

里山はいまだ錦を冬うらら

木枯や雲散らしつつ視野明ける

夜半より木枯さけび家揺する

初雪やうんざりの程降り積もる

一陽来復

季節の移りの中で私が一番好きなのは七草と冬至です。この頃の夏の暑さにはかなわなければ矢張り暗いより日の長い方が好きです。

明日は冬至日暮れの速さも明日がどん底です。理和さんに戴いた柚子をお風呂に浮かべてまた一年の無事を祈りましょう。野菜室に南瓜が少しあるからそれを炊いて食べましょう。お隣の桜も見だし泰山木の花も酔芙蓉の花も、門の山櫓の真赤な紅葉にも遇えだし、山櫓の葉はすっかり散って私の道を掃く仕事もおしまいです。お世話になったいろいろな方のお顔を思い浮かべております。来年が皆様にも私にもどうぞよい一年でありますように祈っています。

平成26・12・21

十二月に入ると途端に寒波がやって来て朝の冷たさは身に染みる様になった。それにしても急な気象変化の繰り返しでもう年末となった。

この一年は早かったとしみじみ考えます。十月の中頃、従来から日本に生育している水仙の球根を購入し庭の片隅に埋めておいた。十一月の初め芽を出して嬉しくて、忘れることが多いが出来るだけ水をあげるようにしていた。寒波の来た朝に、真っ直ぐに伸びた芽が七厘程で五本も育っているのに気付き、なお喜びが増しました。そして三日の、はやぶさを載せたH2Aロケットが打ち上げられたのは、多くの国民が喜んだニュースでした。

はやぶさ2解明探査へ十二月

八ツ頭

森

理和

東京

丸系と子芋をつけぬ八ツ頭

烏賊を干す高速回転冬日和

表紙には夢二の苺日記帳

切りたんぽ手作る店で年忘れ

誕生を心待ちして毛糸編む

願望の柿の苗木を庭へ植う

のし餅を凌ぐ旨みの供へ餅

☆

山莊慶子

埼玉

朝露のイルミネーション草薺

時雨日や寒さ支度をあれこれと

吾が影は細身の巨人冬日浴ぶ

壺毀ち思ひ出なくす寒夜かな

柚子浮かべ平和を思ふ夕べかな

孫達の如雨露もありてパンジー咲く

遺されていていつもの年の瀬となりぬ



☆

赤座典子

東京

冬ぬくし公会堂の大時計

返り咲くデイゴの朱のまがまがし^{あか}

薔薇園のヒューマニティーは枯れてをり

腕章に冬日のあたる昼つ方

冬晴や富士の形に雲浮ぶ

母子地藏揃ひの赤き冬帽子

小六月若き庭師の面皸痕

一月作品より

齊藤裕子・佐藤喜孝

おでん酒母妻娘その他略

佐藤喜孝

おでん屋でお酒を飲んでいるという解釈もあるのですが、ご自宅でおでんを囲んでお酒を召し上がっている賑やかな一家団欒の様子を思い浮かべました。「母妻娘」の他に、きっと息子さんやお嬢さん、可愛いお孫さんもご一緒かもしれない。しかし、あえて女性だけを列挙し「その他略」と詠んでいる。この下五に、作者の酔い心地まで表れているように思います。そして、おでん酒を飲んでいる女性陣の元気な様子を眺めながら楽しんでる作者の温かいまなざしも感じました。(裕子)

中腹の蕎麦屋の庭に棗熟る

赤座典子

毎年、庭の手入れをお願いして造園主の親子が二人で来てくれた。今年は息子さんが若い衆を連れてきた。大将（おそらく七十才前後）は夏に三メートルもある梯子の最上段から転落し、足首を骨折してしまつた。救急車で運ばれ複雑骨折なので手術はなんと八時間もかかった。三か月入院し今はリハビリ中とのことである。骨折時よりハビリも痛みはさぞかしと察して余りある。

転落事故といえは何年前か前、近所のご主人が、自宅の庭の手入れをしていて脚立から落ち、首の骨を折って亡くなつてしまつた。それ以来、我が家の狭い庭でも毎年お願いするようにしていた。

息子さんは お父さんのことを「来年は来ますよ」と明るく笑つて帰つて行つた。

いつものように 畑から取り立ての白菜、大根、里芋を頂き大変有難かつた。庭もすつきりと前より広く見える。一日も早いご回復を願っています。

町中の蕎麦屋でない。鄙びた山の町にあるお店である、と勝手に想像する。蕎麦屋の庭には棗の実が熟れてゐるのが望める。そのみを簡潔に述べたが故に、格調ある作品になつた。

わたしは中腹、といふ言葉に惹かれる癖がある。拙句に「中腹に障子が二枚秋の暮」といふものがあるが、写生ではない。鈴木道彦の「家二つ戸の口見えて秋の山」が好きで影響された句である。今かうやって二句並べてみると、句集に入れない方が良かったと思つてゐるところ。

(喜孝)

中腹に煙ひとすぢ秋の山

佐藤 眞隆

中腹まで家せり上り山笑ふ

隅田 恵子

中腹に大観覧車山笑ふ

小野恵美子

罌や英みどり旅一座

井上石動

この句を読んですぐに「サーカスの唄」の一節が浮んだ。もう知らぬ人も多くなった唄である。「旅のつばくろさみしかないか」とはじまる。掲句は罌の季語一語で旅役者への思ひを代弁さす。作者の心情が濃く出た作品。前句に続き拙句を持出して恐縮だが……「枯すすき囀むで長谷川一夫かな」。(喜孝)

装ひては二つ三つ足す茸飯

斉藤裕子

二つ三つ足すものを何であるかを省略してある。云はなくともよく分る。装ふ時に足す仕草は何でもないやうだが読むものにも温みが伝はる。装ふといふ言葉が生きてゐることにうれしくなった。ご飯を「よそう」、「よそる」、「盛る」、「つぐ」などと使はれるがわたしの子供の

時は「よそる」だったかも知れない。今の我家では一定してゐない。「よそふ」が上品に聞えて好ましくおもふ。

ホームレスに添ふ黒猫や小六月

篠田純子

人それぞれの事情があつてホームレスになったのですが、公園や高架下等でよくホームレスの人を見かける。気の毒に思つてもどうする事もできなくて足早に過ぎてしまう。この句にはホームレスに対する作者の人間愛を感じました。寄り「添ふ黒猫」と「小六月」にホームレスも、読んでいる私達までも救われた気持ちになりました。(裕子)

針に糸通つて嬉し秋深む

須賀敏子

子供の頃、針仕事をする母の糸通しを「私にやらせて!」と言つてよく手伝つた。糸先を口

で湿らせ、指で撚りをかけて細くし、なるべく一回で通すことを目指す。「もう出来たの。凄いなね。」なんて誉められると得意になった事を思い出す。近年優れた糸通しの道具もあるようですが、抵抗して今でも自力で糸通しに挑戦する。子供でも大人でも、針に糸が通つた瞬間はひとりでに誇らしく嬉しい気持ちになるものです。句会に着物で作った素敵な服を着てきて、私達の目を楽ませて下さる敏子さんの針仕事の一こまが目に浮かぶ句だと思いました。(裕子)

鯔の酢に噎せて母似の咳こぼす

竹内弘子

「母似の咳こぼす」というフレーズにとても惹かれました。お鯔を食べていた作者はお酢に噎せ突然咳き込んでしまった。その時不意に「あ、お母さんもお鯔を食べると、よくお酢に

噎せてこんな咳をしていたわ。」と、お母さんと過ごした時が甦つてきた。懐かしいお母さんの姿を思い出しながら、自分が母親に似ている事を喜んでゐる。そんな気持ちが伝わってきた。きっと弘子さん似の素敵なお母様だったのでしょう。(裕子)

冬浅し門前町に肌着買ふ

田中藤穂

若い内は生活に時間が追はれてせはしなく一日が過ぎる。しかし年を取ると子育てに割く時間もなくなり、仕事をリタイアすれば時間の使ひ方に苦労するものらしい。お寺参りなどは心の実益もかねる。巢鴨などの門前町はお年寄向きのお店が並ぶ。などと考へながらこの句を読んだ。かういふ屈託のない作品にあこがれる。他にも「松ぼくり掃き寄せてあり鯉の池」「緋鯉群れ真鯉は離れ石路の花」も勘所を逃さない

佳句となつてゐる。(喜孝)

不器用さなほ進みゐて林檎むく

長崎 桂子

人を笑はすことは難しい。笑はさうすると失敗する。この句などは作者微塵も笑はす気はない。“不器用”がまるで病名でもあるかのやうに書かれてゐる。それが年齢のせいかなほ不器用になつたなあと呟きつつ林檎を剥く。器用な人は一つむくの皮が途切れることがない。さうありたいと思ふのだが薄くなつたり厚くなつたり途中で切れてしまつたりする。句材として自分を写生するのも一興。(喜孝)

踏まれゐて油滲めり椿の実

山莊 慶子

水澄みて魚の欠伸見たりけり

寒雀一羽残らず日溜りへ

一句目、敷石か硬い路面に落ちて踏まれた椿

の実に目をとめた。「油滲めり」と云ひ留めた。二句目、澄んだ水中の鯉であらうか、大きな口を開けた。それを鯉の退屈のあまりの欠伸とみた。ゆつくりと口が開いたのでさう見えたのである。三句目、寒雀の群に会ふ。あれ、日陰には一羽もゐないことに気がついた。三句共に身辺のよく見かける光景なのだが、このやうに新しい角度で捉へると、新鮮な驚きをもつて読むことができた。(喜孝)

秋うらら子亀と紛う牛の糞

赤座 典子

隠岐旅吟の「緑濃く海輝きて隠岐は秋」「秋高し摩天崖へは杖の道」とあるなかの一句。典子さんは見立ての名人である。「縁取の追羽根めける姫椿」にしても「待つほどに白蝶貝の後の月」にしても読むたびに賛嘆してしまふ。掲句も説明はいらぬがまさに「秋うらら」である。(喜孝)

あをキーワード俳句辞典(くっつけい)

靴

右靴が一齊に鳴り寒ざくら	佐藤 喜孝
靴擦れの淡き記憶や竜の玉	芝 尚子
淑気かなジョージ・チャキリスの靴の先	篠田 純子
花踏みし靴をそのまゝ街に出る	鎌倉喜久恵
小春日の日展観むと靴を履く	田中 藤穂
踏石に靴と草履と竜の玉	須賀 敏子
靴音もて石階は果つ雪むらさき	渡邊 友七
いちにちを靴の手入れに走り梅雨	長崎 桂子
晩夏光敗者の直す靴の紐	赤座 典子
秋うらら靴只今といふかたち	東 亜 未
玄関に大き靴あり夏休	早崎 泰江
川狩や小さき靴を並べ置き	芝宮須磨子
どた靴や詩を得んために青き踏み	定梶じょう
白壁に靴跡ひとつ秋の風	吉成美代子
歩合制と靴の片べり暮はやし	吉弘 恭子
春陰や永井荷風の靴の泥	竹内 弘子

佗助や夫の靴見え床屋さん
げんげ田や靴脱ぎ捨てて鬼ごっこ

森 理和
斉藤 裕子

沓脱石

かたつむり沓脱石に罷り出づ
爽やかや沓脱石に朝日照り

芝 尚子
田中 藤穂

靴下

靴下を脱ぐが我が家の炬燵訓
暮早し好きな靴下繕ひぬ
妙齡の赤い靴下春一番
手袋のやうな靴下今朝の冬

森 理和
須賀 敏子
吉弘 恭子
大日向幸江

苦闘

秋すだれキャビアの蓋に苦闘せる

佐藤 喜孝

軽音楽

敵國は軽音楽ぞ盆踊

佐藤 喜孝

警戒

鴨の警戒警報発令中

赤座 典子

計画

計画を立てただけなり十二月
藻の花や計画立たぬ日々過す

長崎 桂子
森 理和

おでん酒母妻娘その他略	佐藤喜孝
中腹の蕎麦屋の庭に棗熟る	赤座典子
風や英みどり旅一座	井上石動
花暦ひと年の幸溢れけり	王 岩
朝寒や形ばかりの会釈せり	大日向幸江
装ひては二つ三つ足す茸飯	斉藤裕子
秋さるや障子の色が目に立ちて	佐藤恭子
ホームレスに添ふ黒猫や小六月	篠田純子



冷え込んできて煙草屋の赤電話	定梶じょう
針に糸通って嬉し秋深む	須賀敏子
鮎の酔に噎せて母似の咳こぼす	竹内弘子
冬浅し門前町に肌着買ふ	田中藤穂
不器用さなほ進みゐて林檎むく	長崎桂子
駈け下りる山は一面花芒	森 理和
踏まれゐて油滲めり椿の実	山莊慶子
秋うらら子亀と紛う牛の糞	赤座典子



火星 一月号	山尾 玉藻
枯蟪蛄の貌のふりむく能舞台	山尾 玉藻
初湯して稚の臍より銀の泡	"
月蝕の一夜明けたる草の冷	小林 成子
万象 一月号	大坪 景章
自転車が通草の藪に突つ込みぬ	"
俳諧に後先なかり春の海	"
やぶれ傘 81号	大崎 紀夫
鶏頭のそばに電信柱かな	大崎 紀夫
六花 一月号	山田 六甲
初化粧妻の背中の丸みきし	山田 六甲
ろんど 一月号	山田 六甲
あをぞらに世界遺産の初景色	すずき巴里
俳句 二月号	すずき巴里
死ぬときは箸置くやうに草の花	小川 軽舟
わたくしは歩く墓地なり龍の玉	四ッ谷 龍
京鹿子 一月号	豊田 都峰
フミングゴ十歩かぎりの秋うらら	豊田 都峰
雲の峰 二月号	豊田 都峰
柳生路の煌めきやまぬ霜雪	朝妻 力
禅寺に飯炊く句寒に入る	"
朝 一月号	岡本 眸
寒鴉見つめつづけて啼かしけり	岡本 眸
水際のさみしさ故のマスクとも	"

自詠自読

立春や三半規管に水あふる

恭子

(二〇〇一年五月)

小さいころからかはよく覚えていない。と言うか小さい頃は自動車に乗った記憶がない。ということとは遠出もしなかったというより遠出もできなかったのだろうと推測できる。東京へ戻ってきてから車に乗る機会が多くなり車酔いということを知った。お医者さんも「三半規管が敏感なんでしょうね」と。会社の寮の山中湖に行くにも何回車を止めて貰ったことか。自分の家の井の頭公園から目の前の三鷹へ行くまでに車をおりてしまった。五分程車の外に出て休み又車に乗る。運転をしている会社の先輩にもなんと言っているやら。

結婚したての頃は新宿から今住んでいる中野坂上



船団 第一〇三号	坪内 稔典
弟はすぐぶら下がる夏の夕	坪内 稔典
荒野野菊知らない人と手をつなぐ	鳥居真里子
蕪村かも信号渡るサングラス	小林 明美
晴れの海静かの海や藍浴衣	中原 幸子
父が逝き母は生き七月を行く	陽山 道子
瓊 二月号	塩路 隆子
風あらばとよもす冬の紅葉谿	塩路 隆子
ホトトギス 二月号	稲畑 汀子
春雨の止みさうに止みさうに降る	稲畑 汀子
白梅に立ち紅梅に歩き出す	"
ボルドーと松阪牛と京菊菜	稲畑廣太郎
現代俳句	稲畑廣太郎
起き上がるまへの寝返り昭和の日	桑原 三郎
空席のとなりに坐る昭和の日	"
八月十五日あのととき御昼たべたつけ	"
春燈 二月号	久保田万太郎
一生を悔いてせんなき端居かな	安立 公彦
炬明りに育つ人情濃かりけり	安立 公彦
戻るには遠き道のり冬木立	太田佳代子
馬酔木 二月号	太田佳代子
遊蝶花風立ち春はをのゝけり	水原秋櫻子
眼前の枯野たしかに來し覚え	徳田千鶴子
桜島噴くや開聞岳眠り	水原 春郎

佐藤喜孝

に買物をして帰ってくるのにバスを途中で一回降りてしまう。タクシーなら大丈夫かと思いい荷物を持って乗り込んだがこれも途中下車。これも駄目だった。

この頃は年のせいだと思いが、どんかんになったのだろう。車酔いというものを忘れたようだ。娘の婿の運転で京都までも何の不具合もなく行ける様になった。嬉しいのか悲しいのかよく分からないが(年をくつたから)……。

春が近づくと毎年感じるのだが、身が軽くなるようだ。平衡感覚も一年分をきれいに洗い流され又、一年間の働きを促してくれる。

一年の始まりを楽しもうと。年をとるものもなかにかいいものだと感じている今日この頃である。

春の雨椎と檜とが隣り合ふ

東亜未

(二〇〇九年五月)

椎はブナ科の常緑高木。榎もブナ科コナラ属の常緑高木で、どんぐりの木。目黒駅から五分ぐらいのところに自然教育園があり、大樹が鬱蒼としています。この二本の大樹を見あげているだけで、大自然!!と坎じます。疲れた時フラッと入ると、大樹に慰められます。

夕風に暮鳴立てて恙無し

桂 子

(二〇一〇年八月)

私の住まいの北側と西側は隣家の駐車場です。西側の駐車場は以前は田圃でそれを埋め立てて、駐車場として今は使用して見えるのですが、コンクリートで固めてないので雑草が生えていて、ちよつとした広場です。

この句は平成二十二年の作で、夕方になると鳴き声はよく聞こえ、特に明日は雨らしい夕暮は鳴き立てていました。六月頃より鳴声は聞こえてくるので、

ああそう言えば去年も鳴いていたなと思う。翌年に鳴声は聞くと、無事で冬眠から覚めたのだなと思い、懐かしく嬉しい気持がしました。

けれど去年も今年も鳴声を聞いていませんと言いますのも隣家は草むしりをしなくて二年前から除草剤を使用するので、赤茶けた草の広場と変わってしまいました。ともあれ寂しい気持です。

峠を出て青野に貨車の長きこと

じょう

(二〇〇九年九月)

句帳にはこの句「旅にゐて」とあります。

〈旅にゐ青野に貨車の長きこと〉。書き間違ひではなく、投句寸前に筆削したもの。大凡、投稿直前に手を入れて、句にしる文章にしる成功した試しのないこと厭というほど経験してはいるのです。にも係わらず字句を改めた、という、当時の精神状態を思慮すれば、掲句、絵に描いたような頭の操作で作ら

れた句ですから、主題の「青野」と「貨車」に少しでも引きつけて表現したかった、それが「峠を出て」になった、ということになりましょうか。

意地の悪い評者なら(真つ当な評者でも)、どんな角度からこの景を見たんだ、といわれそうですが。

朝堀りといふ筈にすずめの斑

じょう

(二〇〇五年七月)

子供のころ、といふことば。後ろ向きのように使わぬ方がいいのかもしれませんが、その子供のころのことです。

「竹の皮」を専門に買ってくれる業者があつて、子供たちに小遣い稼ぎをさせてくれる、嬉しい業者でした。地元の雑貨屋さんが収集の窓口になって。ご存じのように竹にも種類があり、竹の皮が利用されることが多いのは、真竹孟宗の大型のもの。私用にはおにぎりを包んだり草履に編んだり。値段がど

うだったか記憶にないのですが、真竹と孟宗竹の皮はくべつしたはずでした。

いつのことでしたかテレビに、木版刷りの際に使用する「ばれん」の職人さんがとり上げられていて、「ばれん」に使う竹の皮がちらりと映つたとき、あ真竹の皮だ、とすぐに分かつたのでした。黒の斑点があるのが真竹。皮そのものはうす茶色ですから、すずめ色、なのです。

「朝堀り」。たけのこは生ものと同じ扱いをしなくてはならぬそうで、ですから知人から頂くのはいつも堀りたて。家内の生前はすぐ茹でていたようですが、私にはどうも出来かねる。そこで友人宅に贈つて、煮て味付けたものを頂く。友人宅では無論それを承知の上なのですが。

そんなある時。竹の皮でくるんだ竹の子煮を貰つたのでした。むかしはありふれた容器がわり。煮汁は入っていない筈ですが、食べる迄にあちこち煮汁がこぼれて。

密閉容器に慣れた現代では、いささかもてあました容器がわりではありません。

満載の肉へ西日の色重ね

喜孝

(一九六五年九月)

堀内一郎さんの『一郎つれづれ』が昨年末上梓しました。以下はわたしの跋文の一部です。

雪の日に生れし吾れにさかのぼる 一郎

この句文集の著者堀内一郎さんは大正十五年三月二十日生れ。その日は春の雪が降っていたようだ。

わたしが俳句をはじめ『水音』という句会に誘われたのはたしか十八のころ。文中にしばしば登場する武井石艸画伯が主宰者である。その句会に一郎さんはおられた。わたしはそれからいくつかの俳句結社があるいたが、いつも一郎さんが傍にいてくれた。一郎さんの生前中はわたしと幾つ違い意識し

の記憶力が全編ちりばめられている。楽しみに読まれることだろう。

『あを』十周年記念品に会員ひとりひとりに限定一部で句集を刊行した。

天井の分だけ豊明易し

わたしはこの句が大好きで一郎さんの句集名を『豊』とさせていただいた。限定一部ではあるが一部追加し、坪内稔典先生にお送りした。ある日、一郎さんから自分の句が毎日新聞に掲載されていると電話があった。早速図書館に出かけて新聞紙上で確かめうれしくなった。

「毎日新聞」二〇一二年八月十九日 “季語刻々”
よじ

朝夕の水を掴みて母の夏

堀内 一郎

「水を掴みて」がいいなあ。水仕事をしている母の手が生き生きと見える。句集「豊」から引いたが、「母逝きて茄子のしぎ焼一度だに」もこの句集にあ

たことはなかった。この文章を書いて一回り以上歳が離れていたと知り驚いた。もつと年が離れていないと思っていた。十代のわたしにしては『水音』句会のメンバーは年寄ばかりに見えた。見えただけで実際は酒を飲んで気にくければ喧嘩も辞さぬ方々であった。しかしその中でも一郎さんは三十台と年が近かったので親身に交際していただいた。後年、結婚式の司会をして頂き、子供が生れれば二人の名付親になっていただいた。長女の時は早く結婚する名だといはれた。余計なことをする名だなあとその時は思ったが、今は二人とも結婚をし子宝にも恵まれている。一郎兄のお陰だと今も感謝している。

『水音』で覚えたのは俳句ばかりではない。酒や山歩きもここで覚えた。九八ページの那須の温泉の話を読んでびっくりした。わたしはただ行ったといふ事しか記憶していないのだが、一郎さんは隅々まで覚えておられその記憶力にはただただ驚いた。こ

る。母は茄子のしぎ焼が得意だったのか。

そつえば、水仕事とか水仕という言葉をあまじ耳にしなくなった。水に触らないで料理や洗濯ができるようになったからか。(坪内稔典)

扉にハーモニカを演奏している一郎さんの写真がある。中野区上高田にある『カフェ傳』という喫茶店で一日に二回の演奏会を催した時のものです。後日、八田木枯さんがもう終ってしまったのか、と日にちの記憶違いを残念がっておられた。句会に出句された「ハモニカの少年に秋いくそたび」を色紙に揮毫していただき一郎さんにお届した。

掲句は『水音』時代の句です。

薄暑にて兎の齧る箱の棧

じょう

(二〇〇五年八月)

哺乳動物の種類に齧歯類があります。歯が終生のび続ける、と本にあるとおり、固いものをかじらなければ際限なく歯が成長し続ける。ですから、巢函の木や竹の枝を兎は齧るわけです。栗鼠やねずみがそれですし、兎も齧歯類のはず、でした。

ある時ある本を読んでいたら、以前まで齧歯目の動物だったが、とあるのです。ということは、現在兎は齧歯類ではないことになる。で動物百科で調べたら、切歯の数が齧歯類と相違して上顎に二対ある、その為に兎目として齧歯類から離れた、と説明してあるのです。いつからそうなったか知りませんが、近年まで兎は齧歯目、と信じていたのです。

生活に関わることでありませんので何目でも構わないわけですが、何となく寝ざめが悪い。

心太入荷は二・三日後と言ふ 桂 子

(二〇一一年八月)

五月に入ると時々急に気温が上がる日があつて、暦では立夏で当然なのですが、暑さを感じ始めると、御八つ時には朝からの疲れもありほつとしたい時、たまに心太を黒蜜でたべたいとおもいます。

毎年買うお店へ買いに行った折「急に暑くなつたせいか在庫まで全部出てしまいましたから、連絡を取りましたが商品が来るまで三日間はみてください」とおっしゃつた。

心太を食べる方は今は少なくなっていると思つていたので、へえーそうだったのか、まだまだ食する方は大勢いらつしやるのだと認識を新しくしました。

飛ぶものがとぶものを追ふ今朝の秋 純 子

(二〇〇九年十月)

立秋とは言えまだ暑い日、浜離宮に沿つた道で、雀が蛾を追つていた。ちよつと苦勞していた。弱肉

強食とは言え目を背けたところだが、私は終始を見てしまう。ようよう捕まえて運ぶのだが、大きな蛾を低空飛行で、しかも少し飛んでは休む。四五回で目標の場所へ。捕獲に使ったエネルギーが、雀の想定を越えていたのだろうか。しかも急がなければ、他の雀に獲物を取られてしまう。早く食べて！

話は変わる。今年の正月に浜離宮の鷹狩を見に行つた。今年の鷹はマイペースなのか、なかなか鷹匠の言う通りにならない。メインイベントの電通ビルからの飛翔も、有らぬ方へ飛んで行つてしまった。野鳩に気を散らしたらしい。仕方なく飛び流しと言う実演を披露した。空中に白鳩を放つと同時に鷹を放ち、これは見事に空中キャッチし大喝采だった。

きやうきやうと闘志の叫び鷹野かな

いちにさん笑いながら木の実落つ 幸 江

(二〇一三年十二月)

お不動さんの銀杏の実が大きくそして香ばしい。

私の家に毎年銀杏を届けてくれたのは、お宮さんを守る白髪のお爺さんだ。よく晴れた秋の夕方、お爺さんは坂をゆつくりと登つて来る手には新聞紙に包まれた皆の好物の銀杏だ。その夜から火鉢に練炭の怒つたような紅い炎が立ち上る。雪平のような片手鍋に銀杏を入れる。これから先は年上の兄や姉の出番だ。けして手を休めず鍋の実を揺する。パンパン突然銀杏が踊り出す熱々の銀杏は子供達の取り合いになる。私の手に銀杏が来るのは大抵母の一喝の後だ、やつと口に入れた。

銀杏は熱々で舌の先が燃えそうだ。その中に香ばしい匂い、これだ私はこの香りで銀杏を好きになつたんだ。そろそろ大人へ、なる年齢の頃だ。



水

八田木枯

この句集は『あを』創

刊十周年記念の句集。限定一部で二〇一〇年十一月発行。あを句会への投句を纏めた句集です。ゴシック句は『鏡騷』と同型句。また『鏡騷』と異形句は下揃へにして参考に載せました。

生き惜しみ犬蓼はよくうごく花
秋ふかしふるい立たせる一の絲
土用あい家のなかより舩を見て
雨だれをつくり雨ふる魂まつり
水無月の果てはありけり拾遺抄
盆供物日當たるときは黄みどりに
魂まつりはやゆうぐれの波のうら
家々は道にこだはる秋の暮

秋愁のふりむきし母いぶし銀
笄を晝の銀河に匿しおく
秋の暮家に入るとき道の消え
戦勃るか米研ぐ音が眞夜中に
爛熱し布のごとくに身は古び
水鳥はりゃんこなりけり朝の月
とおくてちかき戦や冬の蠅ひかる
昭和古び階段裏の蒲團部屋

梅咲いて禁煙三日ほどもちぬ
挿木していちにち水のうごきづめ
着更着の鳥はかたちの中にゐる
みづいろといふは何いろ春の夕
花に雲近所付合深からず
ふりむけばふりむきし犬彼岸寒
工事現場おぼろめく夜を浮き立ちぬ
鞆に影捨ててきて老いにけり
麥秋やまつしぐらなる歲月よ
はつなつのおもはせぶりの中ゆびよ

五郎助が酒なみなみと注ぎ呉れし
噴水は兩手を上げて落ちにけり
人老いて卵の花腐し詮なしや
噴水が空に浪費をしてゐたり
手鏡を見捨てしミカドアゲハかな
戦役の日々のはざまのみなみかぜ
掛軸のうらより梅雨の月のぼる
面はずすときの兩手や世阿彌の忌
面はずすときは兩手や世阿彌の忌
冷やし桃息はひきとるとき灰と

朝の蚊は硯の海に肢ひたす
筆硯やはやいろづきしきちかうの
生者死者入りまじりたる踊かな
盆鴉數の一つになつてとぶ
空かけて夏ゆきけらし大車輪
夏のくれ時間の中を人歸る
夏揚羽朝は時間のふちにとび
小萩咲きそめし波郷の眼鏡かな
秋あたらしでのひらのうち水逃げて
秋ひややか外へ出たがる老人よ

秋風のかたちの中へしやがみこむ
星はみな海へ流れしまま戦後
秋の雨水はもとより濡れてゐて
秋逝くと雨は雨脚から上る
知つてゐて知らぬふりする吾亦紅
提げるもの胸に抱くもの年暮れぬ
貼りかへし障子の夜を私す
物賣とよくすれちがふ翁の日
白菜の断面桂信子の死
鼻面を氣にして秋蚊果てにけり

目をひらき背中を曲げし寒波あり
はなひるやあの世へ六林男送りこみ
また年が暮れる浮世の浮橋に
冬のくれ道の走るは止めがたき
大寒のつつましやかな中にをり
水餅は靠れて夜をやり過ぐす
冬のくれ家に入るとき道消えし
兒よりもかぐろき雪解はじまりぬ
人糞や剝製の雉子夜をとぶ
梅二月口のまはりで笑ひけり

老の身の慥然としたる餘寒あり
春昂るバンドネオンの音色はも
春なれや良寛さんの大の字は
文盲や椿は落ちてから腐る
まんさくや大と言ふ字は誰も好き
ぐづつきし空白つばき赤つばき
春ふかし紙のごとくに猫吹かれ
ふるさとや土のうへより春のくれ
投げしもの必ず落ちて水溫む

つづく

行雲

佐藤喜孝

晝顔や銀河の回る音がする

てっぺんに蟻の空足草の絮

冬瓜やおむかひさんもゐなくなり

晩秋や日のあるうちに目のさむる

枯芝の大いなるあり四角なり

厚物の陰映きはめたる白

冬紅葉鶴の濡れゐる鶴噴水

たそがれを運んでをりぬ冬の川

ここへくるとわかつてゐたはず年深む

獅子舞の次の家まで向ひ風

二月の吟行

場所 川崎市立 日本民家園

電話：044-922-2181

日時 2月28日（土） 11時集合

集合場所 小田急線「向丘遊園」南口

駅から歩いて13分、バスあり、下車3分
江戸時代の民家など25の文化財建造物を移築・展示
しています

三月の吟行

場所 尾久の原公園

日時 3月28日（土） 11時集合

集合場所 現地公園入口

交通 舎人ライナーまたは都電「熊野前」徒歩8分
田端よりバス「大門小学校」下車すぐ

連絡は佐藤喜孝まで

あとがき

今年から「比来披見」と題したコーナーを作った。わたしが俳詠、句集などを読んでみて気になった句を書きとめたものです。ヒライヒケンと頭韻のひびきが調子いいので気に入ってゐる。比来↓近頃。このごろ。披見↓手紙や書籍などを開いてみることにあつた。この二語を組合せた。はじめからこんな難しい言葉を知つてゐる訳がない。類語辞典を繙き頁を行ったり来たりして作つた。よく見る俳詠の「交流欄」とは趣を異にしてゐる。わたしの勉強帳のやうでもあり、荷が重いコーナーをはじめたものだ。まだ一回目なのに後悔が兆してゐる。

（喜孝）

二〇一五年二月号

発行日 二月八日

発行所 東京都中野区中央2・50・3

電話 090・9828・4244

ファックス 03・3371・4623

印刷・製本・レイアウト

カット／松村美智子・テイリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円（送料共）／一年

郵便振替 00130・655526（あを発行所）

乱丁・落丁お取替えます。